
土の神ライダー 序章

フェニックス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

土の神ライドー 序章

【Nコード】

N8838X

【作者名】

フェニックス

【あらすじ】

第2章ウエストホース偏序章

第2の神の遣い

火の神インフェルノはある心配をしていた。「強情な神か。奴はどうしているんだろうな。土の神ライダー」

その星の西の果てにウエストホースと呼ばれる島があった。別名、獣人島と呼ばれたその島は、ならず者が横行し、賞金首や盗賊がまかり通る島だった。

植物は育たず、地平線の彼方まで砂漠が広がり、獣人達はそんな世界でくらしていた。

彼方より馬に乗り駆ける男あり。彼の名は、レオ・バレッタ。この島で保安官をやっていた。

「デ、今日はどんな奴を裁けば良いんだ。ボス」「酒場に用心棒のボスコがいる。賞金1万の極悪人だ。こんな輩がいるから治安がよくならねーんだ。頼むぜ。レオ」「アア。金はいつもの所にな」「お前も相変わらず抜け目無いな。たまにやーマケテくれよ。こっちは子供の養育費も……………」「ボス。関係無いぜ俺は。マケテほし

けりや俺に頼まねーこったな」「わかったわかった。やってくれるな？お前しかいないんだ。皆ビビって逃げ出したよ」「ハン。ママのミルクでも飲んでてくりや良いんだ。通信切るぜ。探知される可能性もあるからな」

馬を降り酒場に向かうレオ・バレッタ。茶色いマントに黒いテンガロンハット。顔に白髭を蓄えた男。賞金首の間では悪魔と恐れられた男。それが奴だった。

酒場の扉を開け、カウンターにつくレオ。賑やかなホールが彼の登場に静まり返る。

「マスター。酒をくれ」レオはポケットから金貨を放り、カウンターの上でクルクル回す。

パンツとカウンターの金貨を潰し、ブツブツ言いながら金貨をよーく見るマスター。

胸のポケットからボスコの写真をチラッと見せるレオ。

親指を立て、あそこだと合図するマスター。

レオはチラッと写真を見て、ボスコの前に仁王立ちする。

「用心棒のボスコだな？」「ゲヘヘ……………だつたら何だよ？保安官さんよー。この島じゃ、やりたい放題。たりめえだろ？」「イヤ。俺の目の届かない所でやるには勝手だがな」「野郎！ぶっころしてヤラア！」ボスコはビール瓶で殴りかかる。残像を残しテープルに手を付き、クルツと旋回するレオ。バーンとジャンプし、マントをたなびかせ、腰から二丁拳銃を回しながら構える。パーン！パーン！ボスコの脇を銃弾がかすめ、腰を抜かす。

「ヒー！ヒー！殺すな！わかった！わかった」「さあ、盗んだ金を返して貰おうか？」「金？知らねーよ！」額に二丁拳銃を当てもう一度聞く。「金だ」「ヒー……………ワッ……………わかったよ。ホラ。見逃してくれよ。返すから」レオは茶色いきんちゃくを受けとる。きんちゃくをひっくり返し中を確認する。「ウン。丁度だ。マスター。今日は俺の奢りだ。パーッとやってくれ、これで」レオはきんちゃくをマスターに投げる。

「イヤーありがてえレオさん。皆、今日はスターの奢りだ好きにやるうぜー！」指笛や歓声が酒場を包み込む。「さすがすげーや！」「レオさん。ありがとよ」ワーワー

気絶したボスコを担ぎ上げ酒場を後にするレオ・バレッタ。

「ナニー！盗んだ金を酒場の客に奢ったとー！」「そうそう。悪かったか？」「レオ！何考えてるんだ！お前は！」「……………なんも」「ブアカモーン！だいたいお前は……………」「オイオイ、また始まったぜ。ボスの雷が」「まったく懲りないねーレオさんも」職場が笑いに包まれる。

そんないい加減な保安官がレオ・ギャザリスだった。

続く

土の神ライドー 序章 その2

レオ・バレッタ。西の果てウエストホースで保安官をやっていた男。この大陸は賞金首やならず者のたまり場だった。そんな世界でスタ―と呼ばれ、恐れられた男。今日も目覚まし代わりに、ボスに説教を食らう。

「だいたいお前はだなあ！品格が無さすぎるんだ！少しは自覚しろ！」「ハイハイ。品格ね。わかりましたわ。ジャー、パトロール行つて来ますんで」テンガロンハットを被り直し、マントを驚掴みにしながら馬にまたがる。「バレッタ。今日の依頼よ」「ホウホウ。なるほどな。南が騒がしいな。今日は北に行くか」「チツ…………チヨット！バレッタ！」「いいのいいの。どうせ事件が起こりや行くんだから。見回りと称して暇潰しな。付き合ってらんないよ。あんなボス」レオ・バレッタは馬を走らせながら後ろ手に投げキスをする。

「まったくモ―…………どうするの？この依頼！」アシスタントはいつもの事と諦めた。

「今日あたり、新しい保安官が来るらしいけどまだかしらね。イケてたらつまみ食いね」

「ヤレヤレ。やっと巻いたか？厄介な依頼には付き合いたくねーもんな。まあ、いずれやる事になるさ。いずれな」

レオは北の小川にさしかかった。

「さて、魚釣りでもしますかね。オイ馬。お前も飯の時間だろ？その辺で適当にやれや」レオは馬から降り小川に向かった。

「キャー！泥棒！誰かー！」向こう岸で女性の悲鳴が聞こえた。「何？泥棒？マテマテ。オイ！馬！行くぞ！」レオの馬は呑気に草を食んでいた。「ツタクモー！シャーネー行くか！」レオは面倒な事に巻き込まれるのは嫌いだ、目の前で起こった事には躊躇しなかった。小川を蹴り進み、向こう岸に渡り、高い木を三角跳びで登り、辺りを見渡す。

「さて、獲物は？……いた！あそこだ！」マントをたなびかせ、一回転して地面に着地し、残像を残して泥棒を追いかける。

レオの隣を黒い影が走り去る。黒い影は投げ縄を放り、泥棒を捕らえる。

「捕らえた！覚悟しろ！こそ泥！」男は馬を飛び降り、殴り付ける。

「マテマテ！失神している！やめるんだ！」息を切らしながら、レオが追いつく。「お嬢さん。もう大丈夫ですから。コレですよ。盗まれた物は？」泥棒の盗んだかごを手に取り被害者に見せる。「エエ。ありがとうございます」「アア、お礼は保安所まで」「エエ。解りましたわ」

レオは男を見た。

黒いバンダナに赤く長い髪。茶色いベストに投げ縄を片手に持った男。「初めまして。レオ・バレッタさん。僕はピート。今日付けで保安所に配属されました」「ルーキーか？よくやった。まあ、俺も馬があればお前より早かったがな。マア……あれだ、ハンディーだ。くれてやる。就任祝いだ」「ありがとうございます。ジャー保安所に帰ってますんで。また後で」ピートはペコリと頭を下げ、馬にまたがり、泥棒を抱えあげる。

「ピートか。ハンディーがあつたにしても、あの馬の乗りこなし。

縄を投げるタイミング。かなりのセンスだな。鍛えがいがありそうだ。マア俺も、就任当時は……………」ブツブツ言いながら自分の馬に戻る。

馬はお腹一杯草を食べ、呑気に昼寝していた。

「まったくこいつは。肝心な時にコレだよ！」

「オーイ。レオ！暇か？」林の中から大きな虎が出てきた。「おお。チャンク。散歩か？」「アア。なんでも強い熊がいるらしくてな。力比べさ。たいしたことなかったがな」「たいしたこと無いが、怪我してるぜ」「ナーニ。返り血さ」「そうか？手当てしてやるよ。マア来いや」

レオは親友チャンクの手当てをした。

「わりいな。いつも。熊肉いるか？やるよ」「アア。貰うよ」「二人は熊肉をかじりながら、馬を引きずり保安所に帰るのだった。

続
く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8838x/>

土の神ライダー 序章

2011年10月25日11時02分発行